

「長崎原爆と復興の言説」の再問題化

楠田剛士

これまで原爆文学研究会では長崎原爆について、小説・詩・戯曲・評論の分析をはじめ、都市開発と被爆の記憶、占領下の宗教者の原爆意識、詩・絵画・証言に結びついたサークル運動・平和運動など、多岐にわたるテーマを取り上げてきた。特にアメリカによる浦上への原爆投下を恩寵や天啓とする永井隆の言説は、研究会の当初から繰り返し言及されている。本研究会で被爆と復興の特集を組むにあたって、まず注目したのはこのことである。

花田俊典（「原爆文学研究」一号）は、『長崎医大原子爆弾救護報告』を引用しながら、永井隆の浦上燔祭説が「日本人―科学者―世界人という意識過程をたどって出現する」と指摘した。川口隆行（三号）は、原爆は正しかったという本島等の発言と永井的言説との接続を分析し、新木武志（三号）は、被爆の記憶が「政治的・経済的・社会的に利用されていく」例として、長崎の再建が永井の言説を横領し、日本政府やアメリカの責任を不問に付して、原爆の観光地化を進めたことを指摘した。また、畑中佳恵（六号）

は、永井的表象の反転や新たな表象の創出を具体的な作品からとらえようとし、楠田剛士（八号）は、永井を批判する山田かんらの批評が、一九五〇年代のサークル誌のネットワークから鍛えられたことを指摘した。

これらの議論のポイントは以下の三点にまとめられるだろう。①永井的言説がどのように登場するのか。②永井的言説が他の言説とどのように結びつき、流用されるのか。③永井的言説とは別の言説をどのように組み立てるか。①については、永井本人だけではなく、原爆や原発事故を恩寵や天啓と見るような永井「的」言説までを含めて考える必要がある、本WSでも篠崎氏が論じている。②については、そうした永井的言説の流用が、特定の記憶化・忘却化を促すことに注意したい。③については、永井批判の言説そのものがパターン化されていないか、ということも検討される上では避けては通れないだろうし、後述するように福島原発事故後の「復興」言説を考える際のポイントにもなると思われる。



改めて永井の言葉の流通に注目すれば、それは一九四五年から五〇年代の、被爆から復興に向かう時期に発せられたものであった。この時期は、被爆の記憶と復興の想像力が密接に関わっている。つまり、④復興の前提となる原爆投下という出来事をどのようにとらえるか（例えば、永井の言説を流用した復興計画）。⑤被爆後の現在の「復興」状況をどのようにとらえるか（例えば、戦後に建てられたバラックは、住民からすれば住宅の再建としての「復興」であるが、行政側からすれば道路建設ができず「復興」を阻むものになる）。⑥「復興」される未来とは、あるいはされない未来とはどのようなものか（例えば、浦上にあった被差別地区は地名がなくなり復興することがなかったことや、浦上天主堂の保存・撤去問題など）、ということである。こうした議論も原爆文学研究会の中で広島も含めて個別に発表されてきたが、被爆と復興の言説という問題系に攪り合わせることもできる。

①から⑥のポイントは、長崎原爆のみに限定されるものではない。本WSで篠崎氏が報告の最後に取り上げた山下俊一が永井の言説を流用して福島を語っていることなどを見れば、被爆後の長崎の復興をめぐる言説は今日的な問題である。実際、山下批判については、陣野俊史も『世界史の中のフクシマーナガサキから世界へ』（河出書房新社、二〇一・二二、五八―五九頁）の中で行っており、山下について「敬愛する永井の言説を幾分か反復しようとしている」と述べた上で、山下が永井の言説を、あるいは他が山下の言説を「後に巧妙に運用」することに注意すべきだと指摘する。「巧妙な運用」については、「復興」という語の用いられ方も同様の問題がある。深津謙一郎が「原爆文学研究会報」四二号



司会・報告 楠田剛士

で述べたように、二〇二〇年東京オリ
ンピック開催をめぐる原発事故後の「コ
ントロール」や震災後の「復興」をア
ピールする首相や復興相の言葉におい
て、「復興」は政治的に利用されている。
ただし、単なる権力者への政治批判で
はなく、「復興」に対する想像力が問われなければならない。全
体討議の中で新木氏が述べたように、長崎の復興を推進した地元
の有力者の中には、家族を原爆で失ったものがいたが、そういう
人物でも復興を観光という形でしか発想できなかった。あるいは
篠崎氏が述べたように、永井の言説を望まなくても語ってしまう、
言説を壊すつもりが作ってしまう回路があるとすれば、そうした
発想を批判的に検討することで「復興」に対する想像力が鍛え直
されるだろう。

ここで述べた①⑥は、これまでの研究会活動の成果から抽出
したことであるが、東電の責任、日本政府の責任の追及が十分に
なされず（責任を不問に付したままの「復興」、新規制基準（新し
い「物語」）によって原発が再稼働される福島原発事故後の今日
的な問題を考察する手がかりとなるのではないかと考える。もち
ろん急いで付け加えれば、長崎の場合と福島の場合とをストレ
ートに結び付けることはできない。個別の事例に従って分析が重ね
られていくことが必要である。長崎の被爆と復興の言説を問いただ
す本特集は、その取り組みであるが、やはり一つの「復興」言説
ということになる。読者によって検討される前に、以下私見を交
えつつ、それぞれの読みのポイントと今後の課題を見ておきたい。

楠田は、長崎における復興の語られ方の一例として、地元紙の
八月九日の報道を検討し、また市民による詩や短歌や俳句が「復
興」や復興のモニユメントとされる「平和祈念像」をどのように
語ったのかを検討した。ここでは、①報道は建物中心の「遅しい」
復興を語った。②「遅しい」復興のありようは、男神の平和祈念
像のイメージと重なり、また永井隆と北村西望の言説が結びつく。
③その復興語りや永井―北村的言説は詩歌にも見られ、典型的な
語りを形成する。④一方で、その復興のあり方を批判したり、被
爆や復興を両義的・多義的に描いたり、既存の意味を読み替えた
りする作品もある、ということを指摘した。

当日のWSの報告よりも詩歌の分析を大幅に加筆したが、これ
は全体討議の中で、そうならなかった復興、ありえたかもしれない
復興を示すことができるか、という意見を踏まえたものである。
当日は福田須磨子の詩や渡辺巖の短歌を事例として挙げたが、こ
こではそれ以外の詩歌にも見られることを提示した。もちろん今
後も取り上げることができなかった雑誌と作品は多い。調査・考
察は今後の課題であるが、本論で提示した復興の語りや平和祈念
像イメージは繰り返されているのではないかと予想される。また
永井隆と北村西望の言説の結びつきについても加筆したが、永井
については篠崎論、平和祈念像については新木論で詳しく検討さ
れており、本論の主張を裏打ちするだろう。

篠崎氏は、永井隆や関連する言説によって長崎の「復興」にど
のようなバイアスがかかったのかを検討した。明快な論旨である
が、あえて要点をまとめれば以下のようになる。①永井が「浦上」



報告 篠崎美生子

を「聖地」とみなすことは、聖書の考
え方に必ずしもそぐわない。②永井や
片岡千鶴子や本島等の「浦上」観の根
拠である「四〇〇年迫害され続けた」
という言説はフィクションである。③
こうした「浦上」観は、浦川和三郎が
脚色・加筆して語った「浦上迫害史」から引き継がれている。④
永井に近かった片岡弥吉が浦川の言説を再生産し、組織的に永井
の言説を拡散させていった。⑤以上のような言説が非カトリック
者や、信徒の言説さえも抑圧する働きをもったのではないか。

戦後長崎のキーパーソンである永井隆を真つ向から取り上げた
篠崎氏に対して、全体討論では意見・質問が多く寄せられた。そ
こでは永井隆個人に対する関心が集中したのだが、氏の批判は、
永井の言説を生み出すような言説（浦川和三郎等）や、永井の言
説を拡散させるような言説（片岡弥吉等）も射程に収めている。
私が興味深く感じたのはこの部分である。氏は浦川和三郎のテキ
ストが芥川龍之介の「おぎん」の典拠になったことや、今西祐行
の『浦上の旅人たち』に継承されたのではないかということを書
べたが、最近の例でいえば、青来有一の「釘」（『爆心』所収）で
「三百年の間」信仰を守り続けてきたと祖父が語るのには浦川の
であるが、心神喪失状態とされた息子から「神さまがいると信じ」
ることこそ「妄想じゃなかるるか」と語らせていることをどうと
らえるか。同じく青来が、永井隆や高橋眞司やヨハネ・パウロ二
世の著作を参考文献とした「人間のしわざ」「神のみわざ」とい
う小説を書いていることをどうとらえるか。文学作品を検討する



報告 新木武志

際にも、「浦上五番崩れ」言説との距離
感を測る必要を感じた。
新木氏は、戦後の長崎の復興事業が
どのように構想され、実施されたのか
について検討した。これもポイントを
まとめれば、①長崎経済界の主要メン

バーが戦前と連続して戦後復興のリーダーシップをとった。②復
興の専門委員会の議論は、原爆で家族を失った委員であったも被
爆からの復興という発想はなく、長崎港を中心とする都市計画で
あった。③長崎市は広島市にならない、原爆による犠牲によって戦
争が終わったという形で「平和」をアピールしはじめた。④原爆
を観光資源化する動きのなかで平和祈念像が構想された。⑤像の
建設地が浦上に決まる上で、建設の賛否、建設場所をめぐる論争、
原爆被災者や遺族の声などがあった。⑥平和祈念像に掲げられた
「平和」には限界があり、市にとつては重要な観光資源となった。
こうして見ると、戦後の「国際文化都市」の「観光資源化」の
延長線上に、今日の軍艦島の観光地化もあると感じられる。新木
氏は平和祈念像に掲げられる「平和」が、「原爆投下や戦争の責
任を問うたり、核の傘の否定には向かわない「平和運動」の枠
組みにもなっていると指摘するが、そうした脱色化は軍艦島につ
いても、行政や観光産業が「近代化の象徴」や「話題の観光スポ
ット」としてアピールし、「負の遺産」としては語らないことに
現われているかもしれない。また平和祈念像の建設の動きは、東
日本大震災の津波で耐え残った陸前高田市の「奇跡の一本松」の
保存を想起させる。復興を象徴するモニュメントを建設・保存す



コメント 桐谷多恵子

るときには、その是非、観光地化、工事計画、募金活動、被災者の声などが共通して問題になることが分かる。ただし、③に関して触れられた永井隆の評価については異論がないわけではない。新木氏は「永井の主張は、長崎の犠牲が「平和」をもたらしたというイメージを広めるために利用されてきたが、原爆被災をアピールする姿勢が、朝鮮戦争がおり、原爆の使用が検討されるなかで、永井自身によって「安易」で「軽率」だと批判されているのである」と述べている。しかし、氏が引用した永井の文章には、「平和運動への努力がたりなかった」のは「私たち」とあるが、「安易」に考え「軽率」にもってあそんでいたのは「長崎の人たち」だとある。「長崎の人たち」を批判するのは永井だとしても、その「長崎の人たち」の中に永井が「私たち」として含まれているのか。WSで篠崎氏に質問があった「永井隆の変遷」(どういう質の変遷か、そもそも本当に変遷したといえるのか)に関わる問題として検討が必要だと感じた。最新の永井言説研究である四條知恵『浦上原爆の語り―永井隆からローマ教皇へ』(未來社、二〇一五・八)が、カトリック教会における原爆の語りが永井からローマ教皇をめぐるものへ変容していると指摘するように、変遷は受容する側の問題でもある。

報告で挙げられたこと以外にも課題が残されている。例えばコメントーターの桐谷多恵子氏が「復興」は英語では多様な言い方がなされるが、日本語ではマジックワードのように「復興」が使われていると述べた。再建・復旧・回復など、より限定的な場面

での「復興」と、それらを含む「復興」の両面からの考察が必要である。また、これはWSではなく「原爆文学研究」において服部康喜が指摘しているが、教会を通じた復興支援においてアメリカの力が大きかったこと(二号)、長崎原爆乙女の場合でも日米双方の「和解」の物語として語られていったこと(二号)がある。原爆を投下したアメリカとの関係については全体討論でも触れられなかったことが反省点である。服部氏は「問題は、キリスト教会とキリスト者が戦後日本の復興において、何かを封印して来たのではないか、ということである」(一〇号)というが、見えなくなってしまったものは、この問題ばかりではあるまい。行政が、あるいは文学作品が「封印」したものは何か。復興批判は返す刀で報告者自身にも突きつけられるが、本特集では、復興をめぐる過去の思考(永井言説、都市建設、文学作品)を梃子に、オルタナティブな復興や議論の可能性を探ることを目指した。読者からの意見・批判をまちたい。